

令和3年度 事業計画の実施状況

(1) 教育面

○ 教育目標

- 1 学校改善の継承と推進
- 2 学習支援の強化（学習習慣の定着）
- 3 高校の生徒募集の安定化
- 4 中学校の運営・推進と生徒募集の安定化

1 学校改善の継承と推進

「第3期5カ年計画」の3本の柱「学習活動と部活動の充実」「生徒の自主性の育成」「学校の独自性の追求」を継承し、それに基づいて策定した諸目標の達成を図る。各委員会とカリキュラム等検討委員会や校務運営委員会との連携を強化し、教育計画を効率的に実施するとともに改善の推進に努めたい。

⇒ 令和3年度より、各分掌や教科における情報の統一性の確保、ICT活用を向上させることや教育効果の向上や情報活用能力の育成を図るために、ICT委員会を立ち上げた。今年度この委員会において、主に授業におけるICT活用の在り方についての検討がなされ、来年度に活かされる方向にあるが、各分掌や教科における情報の一元化については十分な検討はなされておらず、来年度の課題になっている。また、昨年度後半から、すべての教員にiPadを配布し、各種の会議や授業等で活用されている。

(1) 「学習活動と部活動の充実」

入学した生徒が学力を向上させ、希望の進路を実現できる学校づくり、部活動を通じて心身の充実を図るとともに、その成果によって、地域に誇れるような学校づくりを推進する。

ア 学習活動

生徒の学習意欲を高め、それぞれの進路希望に応じて、必要な能力を向上させることにより、特に国公立大学や難関私立大学への合格者数の増加を目指す。

平成31年度における国公立大学合格者数21名に対して、令和元年度が33名と大幅に増加したが、令和2年度は25名（既卒者2名を含む）と元年度に対してやや減少した。

国公立大学合格の中心となるべき特進I類の生徒数が令和2年度は50名であったのに対して、新3年生の特進I類は38名と減少し、更に、各種模擬試験の結果がやや低い状況にあることから、生徒の意識や教員の指導力の向上が大いに望まれる。

新2年生については、特進I類の生徒数が40名と少ないが、各種模擬試験の結果は新3年生よりは良好であるため、この状態を維持し、2年後の受験に活かし

たい。そのためには、教員間で個々の生徒の情報の共有化を更に進め、HR担任や教科担当などの連携を強化し、よりきめ細かな指導を進め、合格者数を安定させたい。なお、新1年生の特進Ⅰ類は47名となっている。

⇒ 令和4年度の特進Ⅰ類は45名、Ⅱ類は43名の生徒数となっている。

また、令和3年度卒業生の進路状況は以下のとおりである。（4月1日現在）

◎ **国公立大学 21名**

浜松医科大(1) 東京都立大(1) 静岡大(2) 静岡県立大(3) 埼玉大(1)
茨城大(1) 福井大(1) 広島市立大(1) 長野大(1) 都留文科大(3)
岡山県立大(1) 北見工業大(2) 釧路公立大(1) 敦賀市立看護大(1)
福知山公立大(1)

◎ **私立大学 217名**

慶応義塾大(1) 早稲田大(1) 東京理科大(2) 青山学院大(1) 中央大(1)
立教大(2) 法政大(1) 関西学院大(1) 成城大(1) 神奈川大(5)
神奈川工大(11) 北里大(3) 明治学院大(1) 関東学院大(3)
東京農業大(1) 杏林大(3) 明治薬科大(1) 近畿大(7) 専修大(1)
日本大(3) 順天堂大(1) 常葉大(42) 静岡英和学院大(7) 静岡福祉大(4)
静岡産業大(2) 東都大(6) など

◎ **短期大学 23名**

静岡県立大短大部(1) 静岡県立農林環境専門職大短大部(2)
静岡県立工科短期大学校(4) 常葉大短大部(6) など

◎ **専門学校 74名**

富士市立看護(1) 中部看護(1) 静岡済生会看護(1) 下田看護(1)
沼津市立看(1) 静岡県立看護(1) 沼津情報ビジネス(11)
大原公務員医療観光(4) など

◎ **就職 83名**

事務系(4) アクト(1) ジャペル(1) 倉工業(1) 上塗装(1)
技能(66) いなば食品(18) テルモ(4) ジャトコ(4)
公務員(3) 陸上自衛隊(1) 消防士(2) 販売(3) サービス他(7)

- 大学見学を1学年の6月に実施し、早期に進学の意欲を持たせる。例年であれば、特進コースは東大と難関私立大を、進学コースは帝京大を見学していたが、令和3年度について、現時点では、大学側が受け入れてくれるかどうか不明となっている（4月にならないと予定が組めないという返事である）

⇒ 昨年度同様に、コロナ禍のために実施できなかった。ただし、来年度は神奈川工科大学・帝京大学から受け入れ可能との連絡があり、実施できる見通しとなっている。

- 補習だけでなく、学力の定着状況の評価や学習目標に関する面接指導により入試に対する学力や意欲の向上を図る。

⇒ 長引くコロナ禍であったが、例年の通り実施できた。

- ・ 体験学習への積極的な参加をさらに推進する。
 - ⇒ 体験学習としては警察、消防、自衛隊を招いて公務員講座を実施した。
 - また、湘南医療大学を招いて看護講座を実施した。
 - また、中学校において盲導犬ふれあい体験、育児体験を実施した。
- ・ 進学コースについては、昨年度、基礎学力の定着を主眼にベネッセの「マナトレ」を活用し、到達段階に応じてテキストの難易度を上げていくことができた。また、資格取得のための対策時間を設け、漢字検定や Literas 論理言語力検定、ビジネスコミュニケーション検定など多様な資格で高い合格率を示したが、補習を希望する生徒数の減少傾向が見られたので、今年度は希望数を増加させる工夫が必要である。
 - ⇒ 家庭学習の定着を目的にリクルートの「スタディサプリーングリッシュ」（進学1年、進学2年2～6組で実施）、または「スタディサプリー」（進学文理系）を活用し、生徒の学習力の向上することができた。また、Literas 論理言語力検定と英語検定、商業系では各種商業検定のための対策時間を設け、高い合格率を示せた。しかし、補習を希望する生徒が相変わらず少ないことから、希望生徒の増加を促すための措置が必要である。
- ・ 昨年度、進学コースの教室も含めてすべての教室に電子黒板が設置され、Wifi環境が整えられたことを活かし、更なるICT活用等により学習効果を高める。（継続）
 - ⇒ ICT活用に関する教員の意識は高まりつつあるが、活用は一部の教員に限られている現状から、今後の課題となっている。

イ 部 活 動

- (ア) 多くの生徒が部活動に所属し、有意義な放課後にする。
- 4月に部活動加入WEEKを実施し、実際の活動を体験させることにより、入部後の混乱を防ぐ。
- ⇒ 令和元年度68.0%、令和2年度78.6%、令和3年度78.0%と上昇傾向にある。原因は、コミュニティ研究会と写真部の入部が増加したためと思われる。内訳をみると、運動部の減少、文化部の増加現象がみられる。
- (イ) 学校全体で、部活動を応援できる体制づくりを推進する。
- ・ 生徒会新聞に部活の活躍等を載せ、学校全体で情報を共有する。（継続）
 - ⇒ 教員や生徒が大会の結果等を知ることにより、生徒の頑張りについて称賛するなどの声掛けが以前より多くなった。
 - また、朝礼のiPadドライブに大会結果や成績等をアップし、朝のSHRで生徒に積極的に知らせる必要性を感ずる。
 - ・ 本校のホームページに部活動の成績や、活動内容を詳細に掲載する。（継続）
 - ⇒ 従来と大きな変化はなかった。
 - ・ 部活動等の成績を、積極的に報道等に提供する。（継続）
 - ⇒ 市役所などからの依頼に積極的に協力する中で、市役所などの広報誌に本校の状況が掲載される機会が増加した。

⇒ 令和3年度 部活動の結果・成績

(県大会優勝、東海大会・全校大会出場のみ)

- 女子バレー部
高校総体 東海大会3位 全国大会16位
高校選手権(春高バレー) 県優勝(14回目・9年連続) 全国大会出場
- 男子バドミントン部
高校総体 ダブルス 全国出場
団体戦 シングルス 東海大会出場
新人大会 ダブルス・シングルス 東海大会出場
団体戦 全国大会出場
- 女子ソフトテニス部
高校総体 東海大会出場 全国大会出場
- 女子陸上部
新人戦 4×100m 東海大会出場
- 空手部
新人大会 組手 東海大会出場
- 女子将棋部
新人戦 県大会優勝
- バトントワリング部
全国高文祭 文化連盟賞
高文祭 県大会優秀賞
バトントワーリング大会 東海大会金賞 全国大会銀賞

(2) 「生徒の主体性の育成」

生徒一人ひとりが、問題や課題、将来の目標を見据え、自ら考え、工夫し、行動し、達成感を得ることのできる学校作りを進める。

また、昨年はコロナ禍で、多くの学校行事が中止され、生徒の活動が制限されたため、本年度は可能な限りにおいて、学校生活を活性化させるため学校行事を開催したい。

- ・ 富士見祭や集会での生徒会本部や各委員会の自主的な活動を一層活性化させる。
⇒ コロナ禍の中、富士見祭は校内発表のみに制限されたものの、生徒会本部の努力等により、一定程度満足のいくものにすることができた。
- ・ 高校特進コースにおけるHAPや中学のF活動などで、生徒の自主的な活動参加などを推奨し、将来の夢の実現に必要な資質能力の伸長を促す。
⇒ 例年通り
- ・ 学校説明会などにおいて、在学を説明者として参加させることにより、表現力やプレゼンテーションの能力を高める。(継続)
⇒ ある程度、説明会参加者からは好評が得られたものと推察される。

更に、

⇒ 自主的活動や探究活動により判断力や表現力を高めるため、探究学習発表会「静岡県高校生サミット」への参加を取り入れた。また、外部講師の指導により、生徒のボランティア活動への意識やモチベーションが高まった。

(3) 「学校の独自性の追求」

長い伝統を持った私立高校としての特色を更に伸ばし、生徒一人ひとりが愛校心をもてる学校づくりを目指す。

- ・ 英語学習の更に強化し、当面オーストラリア語学研修の実施が困難であることから、それに代わる国際理解を高める活動を模索する。
 - ⇒ コロナ禍のため、富士市少年親善使節団およびオーストラリア語学研修は中止となった。
また、特進Ⅱ類の2年生を対象とした、アメリカNPO法人「Kizuma Across Cultures」主催のGlobal Classmates プログラムに参加し、オンラインによる国際交流を行った。9月～2月の期間に、英語表現Ⅱの授業の一環として、ウェストバージニア州のオーシャンレイクス高校との交流活動を行った。
更に、ジョージタウン大学オンライン英会話プログラムに参加した。
- ・ 「地域への情報発信」の手段として、看板設置、ホームページ等を更に工夫する。
(継続)
- ・ 生徒が校外に出て地域への貢献活動、地域への発信力を高める活動を推進する。
 - ⇒ 主にコミュニティ研究会による地域貢献活動（海岸清掃、富士川河口清掃、富士駅周辺の清掃活動、北口商店街の広報活動、学校周辺自治会との連帯等）により、マスコミへの露出が増え、本校に対する注目度が増した。

2 学習支援の強化（学習習慣の定着）

学習の中心は、授業である。教員一人ひとりが研修を積み指導力の養成に努めるとともに、生徒の学習意欲を引き上げ、自発的な学習の姿勢を育てる。また、昨年度整備されたICT環境を利用し、より効果的な授業を模索する。

- ・ 年度初め、夏休み明けなど、学校生活の開始の時期に、重点的に、生徒の生活習慣、学習習慣の定着を図る。
- ・ 普通科の3コースについて、それぞれ以下の事柄の継続または改善を図る。

特進Ⅰ類 生徒の学習状況や進路意識などについて、組織的に検討し、それらの情報を関係職員間で共有する。

年度間の継続性のある指導体制を構築する。

HAPの活動を常に点検し、より良いものに改善する。

難関大学志望理由書に対する個別指導を充実させる。

⇒ 火～金の7限終了後に、また、長期休業中に大学進学のための学習支援（補習）を実施した。

特進Ⅱ類 全員参加のⅡ類ゼミ（週1回）の継続と、改善に努める。

全員が年間2回全国模試を受験する（3年生はⅠ類に準ずる。）。

⇒ 部活動を活発に行っているコースのため、部活が休みになる月

曜日の放課後を利用して、英語・数学を中心とした、大学進学のための補修を実施した。

- 特進Ⅲ類 I類と合同の習熟度別学習集団を編成する。
2年次から早期に、国公立大学志望者対象の個別の大学二次試験対策を実施する。(継続)
⇒ 特進Ⅰ類に準じた指導を実施した。
- 進学コース 基礎学力を定着させるための進学コースゼミや課題テスト、補習の実施と改善に努める。
⇒ あまり改善は見られなかった。今後大きな改善が必要である。
⇒ なお、新しいカリキュラム編成に合わせて、進学コースは令和4年度1年生から、総合コースという新しいコースになる。

3 高校の生徒募集の安定化

令和2年度高校入学者数311名(外進生293名、内進生18名)に対して、令和3年度の入学予定者数は322名(外進生304名、内進生18名)となり、やや増加した。しかし、地域における中学生数は年々減少傾向にあるため、これまで以上に充実した教育活動と楽しい学校生活を併せ持った環境にすることが必須であり、地域における中学生や保護者から更に信頼される学校にすることが大きな課題である。

⇒ 令和4年度入学者は、327名(外進生314名、内進生13名)であり、昨年度とほぼ同数である。

- ・ 面倒見がよく進路に期待の持てる学校にするため、具体的方策を模索する。
⇒ 現在も検討段階。今後の継続課題である。また、“面倒見の良さ”というのは抽象的過ぎるものであり、学校のアピールとしては不足ではないか、もっと具体的なアピールが必要ではないかとの意見もある。
- ・ 一人ひとりの生徒が楽しく学ぶことができる学校にする。
⇒ 教育課程や教育活動の充実だけでなく、生徒にとって“楽しい学校”作りの工夫が今後の課題となる。
- ・ 広報活動の充実
教育広報部の職員、管理職等による中学校訪問を更に効果的なものにする。
本校を直接みてもらう機会を多くする。
説明会や見学会などにおいて、在校生による説明の機会を増やす。
本校生徒の地域活動への積極的参加により、富士見校の存在感を高める。
学校のホームページや各看板の内容を工夫する。
⇒ 今年度は精力的に地元の中学校等への訪問、学校説明会や体験入学における説明内容に工夫を凝らし、ある程度の効果が得られた。なお、中学校などから本校に対する要望や助言を積極的に聞き取り、そのニーズに対応する姿勢がなお一層高める必要性を痛感した。
- ・ 大学に接続している高校において入学者が増加する傾向にあることから、現在、高大連携をしている神奈川大学、神奈川工科大学以外にも、可能な大学との連携を模索する。

⇒ 今年度もコロナ禍で、各大学との調整が満足にできず、来年度以降の課題である。

4 中学校の運営・推進と生徒募集の安定化

令和2年度中学校入学者数は23名であったが、令和3年度入学予定者は10名と大きく減少した。原因として、コロナ禍により見学会や説明会などの広報的な行事が早い時期から開催できなかったことや、長距離の通学を避ける傾向があったこと、更には、昨年度の入学者選抜において、例年になく不合格者を多く出したことが考えられる。従って、地域の小学生やその保護者の実態把握や外部からの情報の分析などにより、教育活動の工夫や生徒募集の改善に努めなければならない。

⇒ 令和4年度入学生数は17名であり、令和3年度（10名）と比較すれば多いが、令和2年度の23名に対する値としてはやはり少ないと言うしかない。今年度は、例年になく、地域の小学校や塾を丁寧に訪問し、広報活動に務めた甲斐があり、本校入学の意識を持つ児童・保護者の数が秋には25～30名を数えていたが、実際に志願した数は実数で18名となった。これら志願時に及んで他校志願に切り替えた理由について、調査したところ、主なものは次のようである。

- 部活動を頑張れる環境が良い。
- 接続する高校の進学実績が頼りない。
- 将来外国に行きたい。本校における英語の学習体制は中途半端である。
- 1学級しかなく、生徒数が少ないことが不安である。
- 授業が長い（7・8時間は長すぎる）。

これらの理由を改善することが急務であると考えられる。

- ・ 生徒の実態を踏まえた学習指導計画の改善と個性を伸ばす指導を工夫する。
- ・ 8限に自主活動（部活動または自主学习等）の効果を高める工夫をする。
- ・ 教科の学習、F活動、学校行事等の相互の関連や育成したい資質能力との関連などを確認し、より効果的な活動を検討するとともに、学校生活が楽しくなるような行事を模索する。
- ・ 広報活動、入試の回数・方法等、志願者数を増やす工夫をする。

⇒ 結論として、細かな改善と並行して、地域にアピールできるような、本格的な改善が必要と考えられる。そのため、R5年度からの改革の概略を、中高一貫推進室が以下のようにまとめた。来年度、詳細を更に検討することになった。

○ 富士見高校への接続について

これまで特進コースⅠ類・Ⅱ類への接続であったが、これを特進コースⅠ類・Ⅱ類だけでなく総合コースへの接続も可能にする。

○ 改革の大きな柱

- ・ 英語に特化した教育課程（外国語講師3名活用）
- ・ 学習活動・部活動における放課後の有効活用（選択幅を大きくする）

○ 教育課程について

週当たり授業時数 37時限 → 35時限（従来の特進Ⅱコースと同じ）